

古田史学の会・東海

東海 の 古 代

第90号 平成20(2008)2月

会 長：竹内 強

編集発行：事務局 〒489-0983 瀬戸市苗場町137-10

林 伸禧 〈Tel&Fax：0561-82-2140、メールアドレス：furuta_tokai@yahoo.co.jp〉

ホームページ：http://www.geocities.co.jp/furutashigaku_tokai

平成19年11月の例会で発表した「磐井の乱はなかった」に対する質問について、20年1月例会に回答された内容を、数回に分けて掲載します。

「磐井の乱はなかった」に対する 問題提議等についての私の考え(1)

名古屋市 石田敬一

1 はじめに

古田武彦先生は、多元的史観を主張されました。また、邪馬壹国の位置を理路整然と指し示すとともに、これに連綿として続く九州王朝の存在について様々な文献の記事を綿密に追うことによって明らかにされてきました。

そして白村江の敗北を契機に九州王朝は近畿天皇家に取って代わられていくという大きな流れを示されました。これについて、私は、全く同感であると思い、その明快さに感動さえ覚えました。

しかし、磐井の乱については、『失われた九州王朝』の頃の考え方を変更され、磐井の乱そのものがなかったというように述べられています。

そこで、私はこの「磐井の乱はなかった」のアンチテーゼとして、「磐井の乱はあった」のではないかと、例会に自分の考えを提出しまし

た。

これは、古田史学の基盤を確固たるものにするために示した、いわば議論ための資料提示でした。

そうしたところ、11月及び12月の例会で会員の皆様から問題提議や疑問点が示されました。

これらについて、次の項目にわけて私の考えをまとめましたので、ご紹介し、さらに議論を深めるきっかけにさせていただきたいと思えます。

<提示いただいた項目>

- ① 「石井」は「磐井」の省略形なのか。
- ② とともに死んだ日本天皇及太子皇子とは誰か。
- ③ 磐井は、当時のナンバーワンと対等の実力者で、磐井が反抗したのではなく、ナンバーワンから仕掛けられたのではないか。
- ④ 岩戸山古墳は磐井の墓だろうか。
- ⑤ 筑紫君磐井と筑紫君薩夜麻を関連づけるのはどうか。薩夜麻と薩野馬に付けられた筑紫君の意味は違うのではないか。薩野馬の筑紫君は、辱める意味で使っているのではないか。
- ⑥ フジモリ、マルコスそれぞれの元大統領の事例はいかかなものであろうか。フジモリもマルコスも亡命当時すでに実力者ではないので、例としてあげるには不適切ではないか。
- ⑦ 石人石馬の壊れ方は恨みを込めたものでは

ないか。

⑧ 果たしてサチヤマはいつからいつまで捕虜になっていたのか。

2 「石井」は「磐井」の省略形なのか。

(1) 石井と磐井

前々回の例会で、私が述べたのは、いわゆる磐井の乱について『古事記』と『日本書紀』で内容は概ね同じだが、微妙に文字が変わっていることにリアリティを感じるということでした。

これに関して、“石井は磐井の省略形だから異なる字とはいえないのではないか”とのご指摘がありましたので、これについて考えてみます。

「石」は、「岩」や「磐」の省略形であることは、よく知られていることです。

一番わかりやすい例が、磐座です。

磐座は、岩でできた座席で、信仰対象を一時的に迎え降臨させるために設けた岩石・依代です。

その磐座は岩座・石座・岩位・石位・岩倉など様々な字が使われており、『古事記』では、「石位」、『日本書紀』では「磐座」の文字が当てられています。

故、爾詔天津日子番能邇邇藝命而、離天之石位、押分天之八重多那雲而、伊都能知和岐知和岐互於天浮橋、宇岐土摩理、蘇理多多斯且天降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣。

(『古事記』上卷、邇邇藝命一天孫降臨)

(下線は石田による。以下同じ)

于時、高皇產靈尊、以眞床追衾、覆於皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊使降之。皇孫乃離天磐座、天磐座、此云阿麻能以簸矩羅。且排分天八重雲、稜威之道別道別而、天降於日向襲之高千穗峯矣。

(『日本書紀』神代下、第九段)

對曰、天神之子、則當到筑紫日向高千穗櫓觸之峯。吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上。因曰、發顯我者汝也。故汝可以送我而致之矣。天鈿女、還詣報狀。皇孫、於是、脫離天磐座、排分天八重雲、稜威道別道別、而天降之也。果如先期、皇孫則到筑紫日向高千穗櫓觸之峯。

(『日本書紀』神代下、第九段一書第一)

また、岩石の群れが神々になった有名な話があります。迦具土神殺しの時に刀に付いた血が「湯津石村」にほとぼしって、石拆神・根拆神・石筒之男神・甕速日神・樋速日神・建御雷之男神の六神が生成したという話です。

この「湯津石村」ですが、『古事記』では「湯津石村」、『日本書紀』では「五百箇磐石」という漢字を当てています。

なお、『万葉集』では「湯津岩群」とされています。

於是伊邪那岐命、拔所御佩之十拳劍、斬其子迦具土神之頸、爾著其御刀前之血、走就湯津石村。所成神名、石拆神、次根拆神、次石筒之男神次著御刀本血、亦走就湯津石村。

(『古事記』上卷、伊邪那岐命と伊邪那美命一火神被殺) 號啼澤女命矣、遂拔所帶十握劍、斬軻遇突智爲三段。此各化成神也。復劍刃垂血、是爲天安河邊所在五百箇磐石也。

(『日本書紀』神代上、第五段一書第六)

これ以外にも、『古事記』の「石長比売」、「鳥之石楠船神」、「石筒之男神」、「石柝神」について、『日本書紀』では「磐長姫命」、「天磐樟船」、「磐筒男神」、「磐裂神」と表記されています。

つまり、こうした用例からすると、『古事記』の「石」を、『日本書紀』では「磐」に変えて使用するパターンになっているようです。

例外もあります。

いわゆる天の岩屋戸に関してです。これについては、『古事記』、『日本書紀』ともに石を使っています。ただ、この場合も『日本書紀』は「磐戸」には「磐」を使っています。故於是天照大御神見畏、開天石屋戸而、刺許母理坐也。

(『古事記』上卷、天照大神と須佐之男命一天の石屋戸)

是時、天照大神驚動、以梭傷身、由此、發愠、乃入于天石窟、閉磐戸而幽居焉。是の時に天照大神、驚動きて、梭を以ちて身を傷めき。此に由りて發愠りて、乃ち天石窟に入りて、磐戸を閉じて幽り居しき。

(『日本書紀』神代上、第七段)

このように微妙な例もありますが、私の稚拙な知識の中で思いあつた例では、『古事記』の「石」を『日本書紀』の「磐」に変換するのがほとんどのように思います。

従って、この「竺紫君石井」の「石」の文字を「筑紫国造磐井」の「磐」に変えたのは、『古事記』の時点の”石”を『日本書紀』の時点のいわば当用漢字「磐」に修正したということではないかと考えられます。

つまり、「石」を「磐」に単純に変換する『日本書紀』のルールに従ったということでしょう。

しかし、問題があります。

『日本書紀』は単純に変換したかもしれませんが、石井は人の名前です。当時は既に「倭の五王」のように自分の名前を書いていたはずで、石井は、自ら”石井”と書き、名乗り、この文字を使っていたかもしれません。

とすれば、石井を単純に磐井に変換することは、文字を厳密に扱う観点からいえば、『日本書紀』の間違いです。

さらに、『古事記』の「磐井」を『日本書紀』の「石井」にするのであれば、時代の成立順です。文字を省略形にすることがなんとか理解できますが、先に成立した『古事記』の「石井」を後に成立した『日本書紀』の「磐井」にすることは理解できません。

また、疑問も残ります。

なぜ『日本書紀』は『古事記』の「石」を「磐」に変換することにしたのでしょうか。当然ですが、『日本書紀』は、「石」の字も「磐」の字も、ともに使っています。ですから、『日本書紀』の「石」を「磐」に変換するルールに、私は合点がいきません。

是爲天安河邊所在五百箇磐石也。

(『日本書紀』神代上、第五段一書第六)

(2) 竺紫と筑紫

次に、「竺紫君石井」の「竺」と「筑紫国造磐井」の「筑」について考えてみます。

先の「石」については「磐」の省略形ですから関係がありますので、納得はできませんが、一応、よしとしましょう。

しかし、「竺」は「筑」の省略形ではありませんから、単純変換ルールによって変えたとすれば、容認できません。

『古事記』上巻には「竺紫」という文字が三ヶ所に使われ、「筑紫」と区別されています。

太朝臣安萬侶が「竺紫」としたのは伊邪那岐命の禊の場所、天孫降臨の場所、岡田宮（神倭伊波禮毘古命の都の一つ）の三ヶ所です。

そのうちのひとつ、黄泉の国から逃げ帰った伊邪那岐命が禊をした場所については、竺紫ひむかの日向の橋の小門の阿波岐と書かれています。

是以、伊邪那伎大神詔、吾者到於伊那志許米志許米岐、穢國而在禊理。

故、吾者爲御身之禊。而、到坐竺紫日向之橋小門之阿波岐、原而、禊祓也。

(『古事記』上巻、伊邪那岐命と伊邪那美命一禊払と神々の化生)

ここは禊祓いをするあまてると天照大御神と月読命と須佐之男命が生まれたのですから、大変重要な場所です。

通説では、この日向を九州の日向ひゅうがとして、単純に宮崎県にあてています。

「竺紫の日向」と続く時は「竺」の文字を使っている一方で、『古事記』の国生みの場面では、九州を筑紫嶋としたり、4つの国のうちのひとつを筑紫國と書いています。つまり、古事記では竺紫と筑紫を使い分けています。

次生筑紫嶋。此嶋亦身一而有面四。每面有名。

故、筑紫國謂白日別。

豊國謂豊日別。肥國謂建日向日豊久士比泥別。

熊曾國謂建日別。

(『古事記』上巻、伊邪那岐命と伊邪那美命一大八島国の生成)

さらに端的に「竺紫」と「筑紫」が異なる場所や区域を示しているのわかるのは、神武東進記事です。

神倭伊波礼毘古命、その同母兄五瀬命と二柱、高千穂宮に坐して議りて云ふ、「何地に坐さば、平らけく天の下の政をひむか聞しめさむ」と。猶東に行かむと思ひ、すなはち日向より発ちて筑紫に幸行でましき。

(『古事記』中巻、神武天皇一東征)

(読下し：古田武彦著『神武歌謡は生きかえった』26頁)

「竺紫の日向」から「筑紫」へ出かけたわけですから、明らかに「竺紫」と「筑紫」は異なります。

さらに神武東進記事では、この後、豊の国の宇沙、次に竺紫之岡へ向かうわけです。

従って、文字が異なるとおり、竺紫と筑紫は異なる区域であると考えられます。

神倭伊波禮毘古命、與其伊呂兄五瀬命、二柱、坐高千穗宮而、議云、坐何地者。平聞看天下之政。猶思東行、即自日向發、幸御筑紫。故、到豊國宇沙之時、其土人名宇沙都比古、宇沙都比賣二人、作足一騰宮而獻大御饗。自其地遷移而、於竺紫之岡、田宮一年坐。

神倭伊波禮毘古命、其の伊呂兄五瀬命と二柱、高千穗宮に坐して議^{はか}りて云ふ、「何地に坐さば、平らけく天の下の政を聞しめさむと。猶東^{ひむか}に行かむと思ひ、すなわち日向より發ちて筑紫に幸御しき。故、豊の國の宇沙に到りし時に、其の土人、名は宇沙都比古・宇沙都比賣の二人、足一騰の宮を作りて大御饗^{おおみあえたてまつ}獻りき。其の地より遷移りて、竺紫の岡田の宮に一年坐しましき。

(『古事記』中巻、神武天皇一東征)

一方、『日本書紀』では、「筑紫之日向の小戸橋の櫛原」と記するように、「竺紫」を「筑紫」に変えています。「筑紫」は「筑紫」のままです。混在させることになっています。

「石」は「磐」の省略形だから文字の変更が許されるかもしれませんが、「竺」は「筑」の省略形ではありませんから、勝手に変えることは誤りです。

「筑」とは本来異なる文字であった「竺」を「筑」に変換し、「竺」も「筑」も「筑」の字にしてしまったことは間違っています。

しかしながら、これも『日本書紀』のルールに従い、「竺」を『日本書紀』のいわば当用漢字の「筑」に単純に変換したということなのでしょう。

前回の例会で私が主張したかったのは、いわゆる磐井の乱について、『古事記』と『日本書紀』で、内容は概ね同じだが微妙に文字が変わっていることに、よりリアリティを感じるとい

うことでした。なぜなら、『日本書紀』が『古事記』の記述と全く同じ文字、同じ内容であれば、ただコピーしただけと受け止め、史実性をやや疑いますが、微妙に異なっていることは、そうした伝承があった、史実であったと感じ取ることができると思ったからです。

ところがこれまで述べてきたように、「竺紫君石井」を「筑紫君磐井」に変えたのは単純な日本書紀の変換のルールに従ったまでということのようです。

以上のことから、字句が微妙に異なることだけを例に挙げるのは正しい方法ではなく、内容が微妙に異なることを例に挙げ、いわゆる磐井の乱の史実性を示した方が適切であったと思います。

ただ、いずれにしても、いわゆる磐井の乱があったという、その点に関しては、前回、いくつかの理由をあげて示したとおり、私はゆるがないと考えています。

前号に引き続いて、林俊彦氏の「草薙劍異説」を掲載します。

草薙劍異説 (2)

名古屋市 林 俊彦

(三)

1 倭人伝への疑問—陳寿もクサにこだわった？

最近気づいたのですが、『魏志』倭人伝に奇妙な一節があります。

「真珠・青玉を出す。其の山に丹有り。其の木には…
・楓香・有り。其の竹には…桃支。董・橘・椒・ジョウカ有るも、以て滋味となすを知らず。」

日本の古い時代の自然状況を伝える貴重な資料、という能天気な解釈が一般的ですが、この文章はあまりに変なのです。

(1) 形式上の疑問

倭国へ来たのは外交使節団あるいは軍事顧問団であって学術調査団ではないはず。

陳寿に博物学の趣味があったとしても、卑弥呼

の男弟の名すら省く一方で、この詳述の動機は何でしょうか。

「史書」としての形式を逸脱した記述なのです。

(2) 内容上の疑問

「滋味となすを知らず」。大変な指摘です。

古代において、異邦人の方が現地人よりもその土地の植物や食材に詳しいなんて信じられません。

縄文以来、「滋味」に関わりなく「近隣の食べられるものは、季節に応じすべて食べる」のが食習慣の基本だったはずですが。

しかも王充の『論衡』に次の記事があります。

周の時、天下太平、越裳白雉を献じ、倭人鬯草を貢す。

(卷八)

成王の時、越裳、雉を献じ、倭人暢草を貢す。

(卷十九)

白雉を食し、鬯草を服するも、凶を除く能わず。

(卷八)

周の時代、鬯草を献ずるほど「草木のスペシャリスト」だったはずの倭人はどうしてしまったのでしょうか。

「鬯草」の正体はわかりませんが、古田先生の推測によれば

「今後わたしにとっても追及すべきテーマですが、簡単にいえば香りのいい草、あるいは神に捧げる霊草という概念で、まず大きな狂いはないと思います。

わたしの解釈を加えるなら、神酒にひたしたものと考えます。

というのは、服という言葉が、お酒と関係して使われる例が中国ではありますし、鬯草を「服する」という言い方をするからです。内服薬の服ですから体に入れるわけです。ですから香りのついた神酒、屠蘇もその一種かも知れませんが、鬯草をひたしたお酒を飲んだのではないかと、いまのところ理解しています。

ともかく香りのいい草で、神に捧げる霊草であることは確かでしょう。」

(『倭人伝を徹底して読む』11・12頁)

ということです。

自然界に無数に存在する草木の利用法につい

て、果てしなく勇氣ある試行錯誤を繰り返し成果をあげたのが倭人だったはずですが。

なぜに中国人から「滋味となすを知らず」と言われる事態になったのでしょうか。

(3) 深まる疑問

よくある話として、倭人は宗教的に「タブー」とする食材を設定したのでしょうか。しかし4品目は多過ぎるでしょう。

まずくても、口に入るまで手間がかかっても、量が少なくても、食べられるものは全て食するのがつい最近までの日本人の食習慣だったのではないのでしょうか。

『神武記』にある次の歌謡も手掛かりになります。

みつみつし 久米の子等が 粟生には 蕪一莖
そねが莖 そね芽繋ぎて 撃ちて止まむ

みつみつし 久米の子等が 垣下に 植ゑし椒
口ひひく 吾は忘れず 撃ちて止まむ

(『古事記』中巻、神武天皇一東征)

(4) 大胆な仮説

ただ一つの合理的仮定として、「移住先」に自分達のそれまでの食習慣になかった食材があった場合、長期にわたり食料の候補に組み入れない事態は有りうることです。

つまり卑弥呼の時代の倭人たちは移住者だったのです。張政の会った倭人達は、周朝に鬯草を献じた倭人とは別のグループだったのです。

そう考えてのみ陳寿の記述は理解できます。では彼女たちはいつ博多湾岸にやってきたのでしょうか。鬯草を知る倭人たちはどこへ消えてしまったのでしょうか。

2、古田説を手掛かりに

私の仮説は古田説にどこまで援助を受けられるのでしょうか。

(1) 中国(や朝鮮半島)の技術者たちは、慈善心あふれる博愛主義者ではなかった。日本列島の各地の縄文水田の法を伝授してまわったわけではない。倭人側から礼を尽くして「貢献」してきたあと、はじめて「田づくり」の法を授与するときがきた一このように考えるのが、自然のすじではあるまいか。

わたしのこのような仮説、それを裏づけるものこそ、周初貢獻倭人の出身地(金印の志賀島)と縄

文水田(菜畑・板付)の地帯との一致、これである。

わたしたちは、ながらく「稲の伝来」として、問題を扱うのに馴れてきていた。しかし、縄文晩期に関しては、わたしたちはこれを「周田の伝播」としてとらえねばならぬであろう。

(『古代は輝いていた I

—「風土記」にいた卑弥呼—』27頁)

(2) してみると、王充が、

周の時、天下太平……倭人即甲を貢す。

と書き、班固が、

楽浪海中、倭人有り。(分れて百余国を為す。歳時を以て来献す、と云う。)

と書いたとき、当時の後漢の読者は、いずれも、

“ああ、光武帝から金印を授与された、あの倭人だな” そう受け取ったはずなのである。

そして王充も、班固も、そう受け取られることを百も承知の上で、書いた。こう解するほかない。

—中略—

「漢書」の倭人も「論衡」の倭人も、志賀島の倭人だった。わたしはこのような認識をえた。

(『古代は輝いていた I

—「風土記」にいた卑弥呼—』17頁)

(3) さあ困った。古田先生は、周代の倭人も、後漢の倭人(そして西晋の倭人)も同一と考えていたように思える。

ところが最近の先生の論調は変化してきました。『東日流外三郡誌』の分析をきっかけとして、先生は現在、次のような説をたてています。

さて、以上のような例をふりかえてみると、安日彦・長髓彦たちも、「ヒノモト」という「地名をもって」西から東へ、つまり筑紫から津軽へ、移動したのでは無いだろうか、

—これが、今年になって、私がようやく気づいたところ、新発見だったのです。

(『古田史学の会・北海道ニュース』5号、

平成8(1996)年7月、「日本のはじまり」)

「つがる」という地名に「東日流」という奇妙な字があてられている。

一方、安日彦・長髓彦以来の国はしばしば「日下」「日本」と呼ばれている。兄弟は「筑紫の日向」から来た。博多湾岸に「ヒノモト」の地名が豊富に残る。日本列島最古級で最大の縄文晩期・弥生前期の水田地帯、板付の真中が「ヒ

ノモト」だ。その上、なぜか、この地帯では、弥生中期以降、プツリと、水田が「消滅」している。発掘の点でも、東北地方の中で、一番早く、稲作の水田が登場し、発達したのは、北端部の津軽だった。

つまり安日彦・長髓彦は「稲」をたずさえて「筑紫の日向」を離れ、津軽で稲作の方法を教えた。

先生は現在そのように考えておられるようです。

(4) さて倭人伝にヒントを得た私の仮説を整理します。

・倭人は縄文時代から中国に朝貢を繰り返して来ました。その倭人は筑紫の地に「日本」を建国しました。

この「日本」を私は「くさか」と読みたいのですが、この件は次回にまわします。

・「日本」の倭人は「鬯草」を献上するほど草木に詳しくった。

・「日本」の倭人は周朝から稲作を学び発展した。

・「天孫降臨」を契機として、「日本」は倒れ、「倭国」ができた。

「日本の倭人」は鬯草とともに筑紫を去った。

・東北には今も「鬯草」がひっそり生きているのではないか。

次回に続きます。

(初出:「東海の古代」11号、1996(平成8)年10月)

ひろば

五瀬命の「五瀬」の読み方

瀬戸市 林 伸禧

「古代逸年号」の使用事例を収集するため、『歴代鎮西志』(元禄時代(1688~1704)に編纂)に目を通していたら、次の箇所に「五瀬」を「イセ」とフリガナがしてありました。

・欽明天皇卅一年庚寅條:「五瀬國」、

・推古天皇卅四年丙辰條:「五瀬國」、^{イセ}「五瀬」

(『歴代鎮西志』上巻145・189頁)

五瀬命の「五瀬」の読み方には、次のような説があります。

① 「イツセ」説

日本古典文学大系『日本書紀』(186~194頁)では、「五瀬命」を「イツセのみこと」と記載しています。

② 「ゴカセ」説

古田武彦氏は、『盗まれた神話』で長兄「五瀬命」。これは今まで「イツセノ命」と読まれていた。しかし、別段の根拠があるわけではない。

ただ、「名前らしく」読んだだけだ。ところが、宮崎県の地図を見よう(一略一)その北辺、大分県南辺近くに五ヶ瀬川がある(その上流に高千穂町、五ヶ瀬町がある)。してみると、この長兄の兄は「ゴカセノ命」と読みうることとなろう。

—中略—

むろん、このような「地名比定」から考察を始めることは危険だ。

同音地名は各地に存在するのだから。しかし先のような神武の発信地、妻の故地を「日向国」とした場合、右のような地名との関連に目が注がれるのは自然であろう。

(『盗まれた神話』249頁)

と「ゴカセ」と読みうるとしながら、慎重な態度を示めされていましてが、『日本古代新史』(15頁)では、「五瀬命」と記載してあります。

③ 「イセ」説

灰塚照明氏は「伊勢と二見ヶ浦」で古田氏の「ゴカセノミコトと読みうることとなろう」には、「五ヶ瀬町」や「五ヶ瀬川」の名称から半ば肯定しながらも、葦不合命の時代に「五」を「ゴ」と読んだであろうかと、半ば疑いを消し得なかった。

ところが前掲「対談」に見るごとく、「イセノミコトと呼ぶのではないか」というアイデアがある。「理」のある素晴らしい提言、と思う。

もっとも古い数詞は、「ヒ、フ、ミ、ヨ、イ、ム、ナ、ヤ、コ、ト」である。

すでにご承知のことであるが、『古事記』に、
いほつのみすまるのたま いほはり
五百津之美須麻流之球 五百嶺
いほりのゆき いほはらのきみ
五百人之鞆 五百原君

『記』以外では

いたげる いすず いきみ いかこ
五十猛命 五十鈴川 五十君 五十子
いがらし いきみ
五十嵐 五十公

などその例は多い。「五」はほかに「イツツ」「ゴ」と読むこともちろんである。

(『九州古代史の会NEWS』116号、

平成16(2004)年7月、「伊勢と二見ヶ浦(7)」と述べております。

また、灰塚照明氏は、福岡県内に「一ノ瀬、一瀬、二瀬、三瀬峠」等の地名を探索されたけれども、四瀬、五瀬は見つけることが出来なかったようです。

考えうるに、

- ・筑前国には「伊勢浦、伊勢田」、^{ひなた}日向峠、日向山、日向川」という地名が存在します。
- ・灰塚照明氏の調査によれば、神武天皇の母親の玉依姫命を配祀する神社が筑前国(福岡市、糟屋郡、筑紫郡、嘉穂郡)に数多くあります。
- ・『続日本紀』の和銅六(713)年五月條に
五月甲子、畿内七道諸国群郷名、着好而字。
と、地名の名称を変更させています。

- ・養老七(720)年五月に、舍人親王が『日本書紀』を撰上しています。

このことから、「五瀬」を「伊勢」に名称変更させて、『日本書紀』での神武東征の出発点を日向国(宮崎県)とした。(九州王朝を抹消するため。)

このような推論はどうでしょうか。

註1 『歴代鎮西志』：佐賀藩士犬塚六郎兵衛盛純が元禄年間に編纂して藩に献上。

編年体の九州全域の通史。

2 参考文献：『歴代鎮西志』上巻(鍋島家文庫本の写真版本)、新潮社、平成4(1992)年4月発行。

「ひろば」での原稿募集

エッセー、紀行文、各地の遺蹟・探方記事、書物の感想など何でも結構です。

また、古代史の研究の「ヒント」なる事項などは大歓迎です。

1 月例会報告

- 「古代逸年号文献解説 1 『二中歴』(増補)について

瀬戸市 林 伸禧

『二中歴』の成立時期について、古田武彦説を追加説明された。

- 「『二中歴』年代歴の「大宝年号以前群」冒頭一行について

瀬戸市 林 伸禧

冒頭一行「年始五百六十九年内卅九年無號不記支干其間結繩刻木以成文」の「年始五百六十九年内卅九年無號不記支干」の解釈を、古田武彦説、中村幸男説、丸山晋司説等から説明し、中小路駿逸著「結繩刻木から漢字漢文へ」から妥当と思われる説を紹介された。

- 「高市天皇説」の微証について

豊山町 磯田和則

『万葉集』から高市天皇説の微証を紹介された。

- 「磐井の乱はなかった」の質問に対する回答について

名古屋市 石田敬一

平成19年11月の例会で発表した「磐井の乱はなかった」に対する質問について回答された。

なお、質問8項目の内、「⑧ 果たしてサチヤマはいつからいつまで捕虜になっていたか」については、次回の2月例会に説明することとなった。

また、回答した質問事項は次のとおり。

- ① 「石井」は「磐井」の省略形なのか
- ② とともに死んだ日本天皇及太子皇子とはだれか
- ③ 磐井は、当時のナンバーワンと対等の実力者で、磐井が反抗したのではなく、ナンバーワンから仕掛けられたのではないか。
- ④ 岩戸山古墳は磐井の墓だろうか。
- ⑤ 筑紫君磐井と筑紫君薩夜麻を関連づけ

るのはどうか。

薩夜麻と薩野馬に付けられた筑紫君の意味は違うのではないか。薩野馬の筑紫君は、辱める意味で使っているのではないか。

- ⑥ フジモリ、マルコスそれぞれ元大統領の事例はいかがなものであろうか。

フジモリもマルコスも亡命当時すでに実力者ではないので、例としてあげるには不適切ではないか。

- ⑦ 石人石馬の壊れ方は恨みを込めたものではないか。

2 月例会に参加を

日時：2月10日(日) 午後1時半～5時

場所：名古屋市市政資料館(第1集会室)

Tel:052-953-0051

名古屋市東区白壁1丁目3番地

交通機関

- ・地下鉄名城線「市役所」駅下車、東徒歩8分
- ・名鉄瀬戸線「東大手」駅下車、南徒歩5分
- ・市バス「市政資料館南」下車、北徒歩5分
- ・ 「清水口」下車、南西徒歩8分
- ・ 「市役所」下車、東へ徒歩8分

駐車場

- ・名古屋市市政資料館：12台収容(無料)
- ・ウィルあいち(愛知県女性総合センター)地下駐車場：南隣、有料(30分170円)
- ・鈴木不動産コインパーク：南東角交差点の東、有料(40分200円)

参加料：500円(会員無料)

今後の予定

3月例会：3月9日(日)名古屋市市政資料館

4月例会：4月13日(日)名古屋市市政資料館
例会は原則として毎月第2日曜日です。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻・早退もかまいません。

例会での研究報告、見解発表は大歓迎です。資料を配布される場合はなるべく16部用意願います。